



愛光NEWS

2021年5月

2021（令和3）年6月11日発行

（編集）愛光本部総務部

（TEL）043-484-6391

（メール）<http://www.rc-aikoh.or.jp/>

奄美地方から東海まで、平年と比べて早い梅雨入りとなりました。関東地方も早々に梅雨入りかと思いきや梅雨入り宣言は例年より遅くなりそうです。うっとうしい梅雨空も四季の移ろいと思えば我慢のしどころでしょうか。

一方、東京五輪パラリンピックは国民の理解や不安を拭いきれないまま、開催まで50日を切りました。平和の祭典として、梅雨明けの夏空のようにスカッと晴れわたる企画運営を願うばかりです。

□事業経過など（2021.5.1～）

月/日(曜)	記 事
5/3(月)	憲法記念日
4(火)	みどりの日/総務省：15歳未満のこども人口40年連続減少
5(水)	こどもの日
6(木)	メンター委員会/地域食堂委員会
7(金)	管理職員評価面接/インターンシップ受入れ(1名)
7(金)	緊急事態宣言東京大阪京都兵庫県、千葉県含むまん延防止5月末まで延長
10(月)	ICTプロジェクト
11(火)	65歳以上高齢者新型コロナワクチン接種始まる
12(水)	人材育成プロジェクト/はちす苑利用者職員新型コロナワクチン接種
12(水)	緊急事態宣言、愛知、福岡県に発令
13(木)	広報委員会
14(金)	業務執行理事会
16(日)	緊急事態宣言、北海道、岡山、広島県に発令
18(火)	感染症委員会・衛生委員会
19(水)	施設長会議/はちす苑利用者職員ワクチン接種
20(木)	採用後1年面接（～21）
21(金)	業務執行理事会
21(金)	厚労省米モデルナ製英アストラゼネカ製のワクチン承認
23(日)	緊急事態宣言沖縄県に発令
24(月)	インターンシップ受入れ(1名)
25(火)	後援会運営委員会/業務執行理事会
25(火)	障害施設65歳以上高齢利用者新型コロナワクチン接種
25(火)	コンプライアンス委員会
26(水)	決算ヒヤリング
26(水)	はちす苑利用者職員新型コロナワクチン接種
27(木)	監事監査（事業・財務）
28(金)	緊急事態宣言6/20まで延長
6/5(土)	理事会

■おもな出来事

□理事会開催

6月5日(土)、本年度第1回理事会開催。2020(令和2)年度事業を総括する事業報告案、決算案、次期役員改選案など、評議員会提出議案の協議を実施しました。全役員(理事10名、監事2名)が出席し、本部事務局提案を原案通り承認、6月20日(日)に評議員会を招集し、承認を得ることを決議しました。

これに先立ち、法人監事による監査が実施されました。滑川監事による事業監査は例年ですと各事業所を訪問、実地調査と聞き取りを行っていましたが、本年はコロナ禍のため各事業部長からの聞き取りとなりました。井上監事による財務監査は、決算について聞き取りが行われました。各監事からはそれぞれ指導や助言をいただきました。

□ワクチン接種の続報

日本でもやっと新型コロナウイルスワクチン接種が軌道に乗ってきました。法人では、先行して高齢者ケアセンターはちす苑で利用者職員に対して、4月から6月にかけて実施しています。障害者施設では、65歳以上の高齢障害者35名が5月25日接種を受けました。障害施設等の他の利用者や職員は、佐倉市の配慮で7月20日以降に実施できそうです。

心配された副反応は、やはり2回目接種の際に職員を中心にみられています。反応はさまざまに発熱、倦怠感、頭痛、腹痛、下痢等がみられました。施設では、解熱剤を準備したり、接種翌日を公休にしたりとできる限りの対応を行っています。これも感染拡大防止、集団免疫をつくるための準備と思い臨んでいます。

□職場定着への歩み

法人では、理事長、副理事長、人事担当理事による新任職員への個別面談を、採用後3か月前と1年後に実施し、職場への適応状況を確認しています。本年は、5月20日、21日に実施、昨年採用の正職員11名(新卒8名、雇用変更職員3名)との面談を行いました。

福祉業界は3Kとか4Kなどと言われ、人材確保、定着に苦慮しているところです。法人では、新任職員の人材育成、定着を目的とした「メンター制度」が順調に推移しています。

面談では、「メンター(相談役職員)がいてくれてよかった」「1年が経過して、メンターとメンティ(新任職員)の関係はなくなったが、今後も相談に乗ってくれる」周りからは、「1年が経っても、わからないことは聞いていいよと言ってくれる」などの声が聞かれました。現場職員が、人材育成の意義を理解し、支援してくれていることを感じました。これからは、彼らが反対の立場になって、新任職員を指導、その後中堅職員として活躍することを期待したい。

■月報から

□古いおつきあい～千葉女子高等学校作品展（福祉相談室）

愛光後援会では、愛光本部のある“ギャラリーAIKOH”で、『千葉県立千葉女子高等学校 家政科 オンライン作品展』と題し、家政科および家庭クラブの生徒さんが制作した作品の展示会を（5月17日～6月25日まで）行っています。

同学校との関わりはさかのぼること約40年。愛光が佐倉市に移転する前の稲毛に施設がある1982(昭和57)年から始まります。当時の愛光は、「社会福祉法人 視力障害者愛の友協会」という法人名で同学校とはお隣り同士でした。施設は「盲児施設 愛光学園」、「精神薄弱者更生施設 明和園」、「救護施設 啓明園」がありました。

同学校の吹奏楽部の生徒さんが「盲児施設 愛光学園」に来所され、演奏会を開催していただいたことがスタート。その後、家政科クラブが作成した食事用エプロンの寄贈や、クリスマスに手作りクッキーをプレゼントしていただける間柄になっていきました。また土曜日には4～5人のグループで施設の子供達と遊び相手のボランティアとして来所し、朗読やピアノ演奏、掃除などの活動を通して、さまざまな関わりがあり、地域交流のさきがけになったようです。

昨年はコロナ禍で同校も休校し、制作活動が十分にできなかったとのことで、展示は中止となりました。今回1年ぶりの展示で、愛光ホームページに作品の掲載、YouTubeにて動画を掲載することでオンライン展示が実現しました。法人としてはマスク着用などの感染対策を行っていただき、見学可能ですが、オンライン展示を手元のスマートフォンやパソコンから見ていただきたいと思います。（福祉相談室相談員 林 拓也）

□日中活動（ルミエール）

今年度施設内での日中活動を新しい体制で開始した。6つの班を編成し職員と利用者が所属してさまざまな活動をはじめの予定である。今まで利用者と散歩をすることが多かったが、今年度は「運動」や「園芸」等利用者と一緒に楽しめる時間を増やしていければと考えている。利用者と一緒に収穫した野菜を食べたり、元気に運動をしたりと多くの利用者が参加して楽しめる場にしていきたい。（ルミエール課長 原 宏之）

□階段にセンサー設置（リホープ）

4月末に利用者が2階の階段から踊り場まで転落するという事故が起きた。幸い、かすり傷程度で大きな怪我にはつながらなかったが、毎朝行っていたゴミ集め終了後のことだった。エレベーターへ向かうつもりで、行き過ぎてしまい階段を踏み外してしまった。これまでも別の利用者が2階階段を一段踏み外し、職員が支えるというヒヤリハットがあがっていたが、利用者個人の問題と捉え、歩行ルートの変更や目印を分かりやすくする等の対策を行っていた。今回の事故を受けて、職員間で話し合いを行い、高齢化による視力の低下、階段前の絨毯（触覚の変化）に気付けないという感覚の低下等を考えると、個人の問題ではなく、全体の問題として捉え、対策を練る必要があるのではないかと結論に至った。対策について検討した結果、階段前にセンサーをつけることにした。現在、デモ用商品をお借りし、設置している。利用者自治会でも意見を聞き、「段差に気をつけましょう」との音声で「階段に気をつけましょう」に変更して欲しいとの要望があがった。今後、センサーを購入し音声の変更、タイムラグ変更の設定等を行う予定である。

（リホープ課長 稲垣 直子）

□夏だから、 サンドイッチにキュウリを入れてみるのはどう（めいわ）

2階の男性利用者の発案で、5月9日（日）にサンドイッチを作った。その時の具は、「卵」「ハム」「チーズ」だった。当日の手伝いはそれほどなかったが、その場で交わす会話や雰囲気が楽しいひと時となったようである。6月に入り、同じメンバー（2階の男性）が集まり、「前回のサンドイッチはどうだったか」と意見を聞いてみた。皆が集まったからなのか、積極的に意見を言ってくれた。驚いたのは、1ヵ月の前のことだったのに、その時の具材も明確に覚えていた。その場で「もう一回、作りたい」と意見が上がり、

（Q:サンドイッチの具材は何がいいでしょうか）「A:キュウリを入れてみたいね」

（Q:なぜ、キュウリを入れたいと思いましたか）「A:夏だから、合うと思うよ」

（Q:なるほど、季節にぴったりのものですね。他に入れたいものはありますか）

「A:じゃがいもはどう？キュウリに合うと思うよ」・・・その後も楽しい会話は続いた。

日常の何気ない会話の中で、自分の意見を言ってみたり誰かの意見を聞いたりすることは、お互いの存在を認めあうことにつながる。それと、誰かと意見が一致したらお互い褒めあう。

私たちは支援する立場として、どれだけ利用者の身近なできごとに関心を持っているか、どれだけ楽しい話題にしているか、継続して関心を持って接しているかを考える。そして、そこで気づいた新しい発見や感動を多くの支援者間で共有しているかを振りかえってみる。

生活の質の満足度を高めるには、高度な技術や明確な計画が必要ではなく、利用者が生活の中で気づいてくれる小さな出来事に関心を持って、話を傾聴し、利用者の目線に立って話ができる支援者の謙虚さと素直さだけあれば可能なことであると思う。

（めいわ課長 李 連淑）

□自主生産と受注作業（佐倉市よもぎの園）

先月、報告させていただいたが、私立保育園からのワッペン製作依頼が正式に決まった。体操服に貼り付けるとのことなので今後、一定の受注が見込まれる。現在はアイロン接着素材や効率的な生産方法などを考えているところだ。また、生産においてどの過程で利用者が力を発揮できるか検討をしている。他にも自主生産品の新たな試みも動き出しており、保冷材やホッカイロなどを入れることができるスカーフなどを試作している。

受注作業においては養生パネルのメンテナンス作業の話が舞い込んできた。作業内容などはとてもシンプルで誰でも携わることができそうである。

受注量についても事業所の生産能力に応じて調整をしてくれるとのことなので今年度の要の作業になる予感がする。利用者、職員とも前向きに捉えており、次月は実際に取り組んでいる事業所へ見学に行く予定である。

いかなる時でも“挑戦していく姿勢”を持ちながら現場の士気を高めていきたい。

（佐倉市よもぎの園 近藤 真一）

□実家を出てグループホームへ（ワークショップかぶらぎ）

かぶらぎワークセンター時代の平成 21 年から利用している方が、今回グループホームへの入居を決めた。

環境の変化や疲れにより情緒が不安定になる特性があったが、福祉サービスや家族による支えを得ながら、暮らしを成り立たせてきた。

かぶらぎでは、当初は特性に起因した周囲との摩擦が大きかったようだが、現在では作業活動を自分の“勤め”として意欲的に通所している。それは“いつもと変わらない日常”としてパターンとなり、安定の一助となっていたように思う。

今回のケースでは、家族側に日頃の本人への対応について蓄積された心労があったという背景もあり、発案は本人ではなかった。しかし数回に亘った体験利用の中で本人に感想を聞くと「親元を離れるということに、少し羽を伸ばせる感じがある。」とのことで前向きに進捗した。

近々、本人、家族、相談支援事業所とグループホーム、ワークショップかぶらぎで会議が持たれることになっている。本人と家族にとって良い選択だったと言えるよう連携して支援していきたい。

（ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹）

□地域の社会資源を開拓して（ジョーの家）

一昨年入居した女性利用者がいるが、これまでは髪を切ろうと思ったときは幼い頃から通った地元の美容室まで出かけていた。ジョーの家での生活も落ち着いた今、現在の生活圏である佐倉市城から京成佐倉駅までの間にある美容室を新たに探してみようかと考えているという。

グループホームにおいて、生活面で必要な支援を受けながら生活しているが、基本は“地域の中で生きている”状態にある。まさに現在の自分の住処を新たな拠点として、その地域の社会資源を開拓していこうとしているのだと言える。スタッフとしては、この動きを注視しつつ、本人がうまく繋がれるよう必要な支援をしていきたい。

（ジョーの家サービス管理責任者 宮部 和樹）

□やりがい 生きがい 高齢者が求めるものは（はちす苑）

デイサービス利用者、視覚障害のある女性 K さん。パッチワークの先生をされていた方で、布のマスクを沢山作っては、苑に持ってきて下さるようになった。本人と意向について話すなか、“少しでも世の中の役に立ちたい”というお気持ちが強いので、寄付する所と一緒に探すことにした。根郷地区社協ちょこっとサービス・非営利活動法人バルアンギン・市社協の善意銀行の方々に声をかけると、快く苑に取りに来て下さり、本人から直接寄付することができた。

皆さん、Facebook や広報に載せますと言って下さり、なかには、後日『感謝状』を届けてくれる方もいた。本人は、「微力ながら、役に立ててうれしい」と話され、とても喜ばれていた。私達職員も、傍で本人のうれしそうな顔を見られて、幸せな気持ちになった。今後も、福祉サービスの提供のみならず、自己実現の橋渡しも広げていけたらと思う。

（居宅サービス課課長 鈴木 亜希子）

□中高生の居場所作り（佐倉市南部児童センター）

「児童センターって17時までだよ。なんかつまんない」毎日のようにバスケットボールのシューティングをしにきていた中2ののぶ君（仮名）が、パタリと来なくなった。「おれは、特別支援学級だから、頭が良くないです。部活では当たり前のようになっています」などと、自分のことを日々吐露していく。

4月から、図書室を開室。それに伴い、消毒業務が増えた。17時閉館だが、インストラクターの気持ちが先走り、のぶ君がまだ退館していないのに、閉館準備の打ち合わせする日もあった。後日「追い返されているみたいだ」とのぶ君のつぶやき。ア～あ 反省 反省。こちらの都合よりも、来館者の気持ちを優先すべきだった。

今年度の目標は、「中高生の居場所づくり」

課題①これから日が長くなる。再度行う内容を見直して、ギリギリまで遊べるようにできないか。

対応策：終了していない業務は、翌日の開館前に行う。朝の10分間のミーティングを廃止

②卓球やバスケットボールの遊具貸し出し時間の見直し

対応策：空いていても20分で交代→次に使用する子がいない場合、最大40分まで延長可

コロナ禍、消毒業務が増え、「時間内にやり切りたい」という気持ちが先に立ってしまいがち。しかし、インストラクターの主たる業務は「来館者対応」今一度、原点に立ち返り、反省の日々。5分だけ卓球をしに来館するなど、中高生の利用が徐々に増えてきた。

（佐倉市南部児童センターインストラクター 鈴木 信子）

□学童保育所より（学童保育所）

時々、学童の卒所生が訪ねて来ることがある。「変わってないね」「下駄箱の色変わったんだね」「百人一首まだやってるの？燃えたよね～」などと、ひとしきり思い出話や近況を話して帰っていく姿を見ていると、学童が彼らにとって、いかに心地よい場所であったのかと思うとうれしくなる。コロナ禍の今、できる限りの役割を果たしたい。

（大崎台学童保育所からの報告より）

先日、校庭に卒所生が来て、現在の小さな利用者と遊んでくれた。ふいに、かつて共に時を過ごした職員に歩み寄り「あの時はすみませんでした。僕が悪かったんです」と声をかけてきた。学童利用期間に伝えられたこと、受け止めきれずに反発したこと、それが何年も気にかかっていたようである。「伝わっていたのね。良かった・・・」ベテラン職員が目を細めた。改めて、反抗期？にかかると子どもたちの成長にかかわる業務なのだと、日常を省みた。

（寺崎学童保育所からの報告より）

（職員に）「ねえ、ちょっとだけマスク外してお顔見せて」という女児。4月に初めて会った時からずっとマスクをしていたので、お互いに顔全体を見るのは初めてだった。しゃべらずに2秒だけ、と約束をして。コロナ禍ならではのワンシーンである。

（第二根郷学童保育所からの報告より）

（学童保育所主任 齋藤 理江）

□介護予防のための地域ケア会議 始動！（総合相談センター）

19日（水）、「第1回介護予防のための地域ケア会議」を開催した。参加者は10名、見学者は8名となった。外部からは理学療法士、管理栄養士、薬剤師に助言者として参加していただき、それに包括の専門職（看護師、主任ケアマネ、社会福祉士）、生活支援コーディネーターが加わり2事例の検討を行った。

今回の事例は、「意欲がある方の活動範囲の考え方と支援方法」と「意欲低下が見られる方の意欲の引き出し方について」が大きなテーマだった。真逆のケースであったが、身体機能の維持や栄養面、家族の意識改革など、多面的な視点から利用者の自立支援についての考えが提案され、さらにハード面、ソフト面、社会資源の活用が話し合われた。

初回ではあったが、司会の包括職員が入念に事前準備や打ち合わせを行っていたことや、参加者の御協力もあったことでスムーズな進行ができた。専門職からの助言は的確で、活発な意見交換の場となった。今年度は、包括職員が事例提供者となり進めていくことになるが、居宅のケアマネや地域の事業所の協力がなければ継続できない。会議の目的を周知し、理解を深めていく年としていきたい。
(総合相談センター所長 森由美子)

□ワクチン接種後、落ち着いたら（南部地域福祉センター）

65歳以上の方のワクチン接種が始まり、センターの利用者からも、「1回目のワクチン接種が終わり、次回〇日が2回目です」などの声が聞かれるようになった。南部地域福祉センターでは、囲碁関係の同好会、サークルが3つある。内、2グループは、人数も少なく、感染症対策を徹底して、活動を行っている。先日、まだ活動していないもう一つのグループの代表者の方が来所した。ワクチン接種も始まったので、「2回目のワクチン接種を終え、さらに2週間経過後の会員という条件で、7月頃から、活動を再開したい。」との話があった。現在の会員は33名。やはり、人数制限をしておきの活動となるが、約1年ぶりの再会、再活動となる。

また、介護予防関係の地域の団体で「お元気クラブ」というグループがある。体操やふまねっと、脳トレなどで介護予防を行ってきたが、新型コロナウイルスの影響で1年以上活動が休止となっている。代表者の方からは、やはりコロナウイルスが落ち着いたら再開したいとの話があり、こちらは会員が2回目の接種が終わって、9月頃から再開したいとのことであった。センターでは、まだ再開できていない活動やイベント、行事も多々あるが、今回のワクチン接種で少しずつであるが、再開できるものが増えてくると思われる。

(南部地域福祉センター所長 横川 民夫)

■職員状況（5/31現在）

	人数	前月比
正職員	183	
サポート職員	36	
非常勤職員	137	+4
計	356	